RICOH
imagine. change.

CASE 01: 北里大学病院 様

100年後、病院は違うカタチになっているかもしれない

首都圏の在宅医療が10年後にはカオス状態に…?!
秩序を見出す画期的な取り組みにRICOH Unified Communication System（RICOH UCS）が貢献。

RICOH UCSだからこそ実現できた課題解決型テレビ会議

課 題

○ 忙しい医療・介護従事者達を一堂に集めて勉強会を開催したい
○ 診療カルテなど、個人情報保護が必要なデータも共有したい
○ 機器が苦手な人でも気軽に使えるような設定・操作にして欲しい

解 決

● 最大20拠点を同時接続、どこからでも会議に参加することができる
● 端末相互に認証された場合のみ接続が可能など、安心のセキュリティ設計
● ボタンタッチで利用できる、家電のような簡単操作

背景と経緯

首都圏に住む人は要注意。急速に増える高齢者が生む医療危機

団塊の世代が75歳以上になる2025年、4人に1人が後期高齢者となり、日本は世界に先駆けて「超高齢社会」を迎える。それにより、医療・介護サービスの需要が高まり、社会保障財政のバランスが崩壊。俗に言う「2025年問題」だ。総務省の統計によると、今後急速に高齢化が進むと見込まれるのは、首都圏をはじめとする都市部。高齢者の住まいの問題をはじめ、従来と異なる問題が顕在化すると見込まれる。

「例えば、東京・町田市の死亡者数のピークは2035年頃。現在の医療の仕組みが変わらなければ、救急搬送はパンク状態、受け入れ先が見つからず、重症にもかかわらず家で待機するという事態になりかねません」

そう警鐘を鳴らすのは、北里大学病院「トータルサポートセンター」の小野沢滋センター長だ。

専門職が集まった他職種連携組織で超高齢社会に備える

小野沢センター長は、「在宅医療」という言葉が生まれるずっと前から、在宅医療と退院支援に真摯に取り組んできた。だからこそ見える、医療・介護者関係の連携不足。

「現在では、薬局の薬剤師が、大学病院の医師と顔を合わす機会はめったにありません。在宅介護のヘルパーさんが利用者の日々の変化を医師に直接伝える術も、今の制度ではむずかしいのです」

そこで2013年12月8日に発足したのが、「相模原町田地区介護医療圏インフラ整備コンソーシアム」（北里病院地域連携事業）だ。この組織は、非公式の多職種連携コミュニケーションの場。参加条件は、「すべての市民の真の希望に沿って、医療・介護が提供され、人としての尊厳が保たれる社会を実現すること」に賛同できる人。小野沢センター長自らが行脚して有志を募り、そのうちの1人から「コンソーシアム化」の提案があり組織化に至る。紆余曲折もあったが、地域の賛同者は続々と増えていった。今もその広がりはとどまることなく、2015年3月現在、病院や薬局、地域包括支援センター、居宅サービスなど約107の事業所が参加、拠点は約23にも拡大。そのネットワークづくりに貢献したのが、「RICOH Unified Communication System（RICOH UCS）」だ。

小野沢センター長との出会いがRICOH UCSに命を吹き込んだ

「小野沢先生に直感的に“使える”と思ってもらえたときに、なんとか医療分野で役立てられないだろうか、と具体的な提案を続けました」

そう話すのは、小野沢センター長が現在も非常勤として通っている亀田総合病院の、当時のリコー　マーケティング担当　栗原正美。

「従来のテレビ会議システムにはない可能性があると、小野沢先生はひと目でご理解してくださいました。また、日々の業務に追われる医療関係者にとって、すぐにシステムが立ち上がり、ボタンひとつで簡単に操作ができるというRICOH UCSの機能性も重宝していただきました」

実施に至るまで、足繁く小野沢先生の元に通い検証を続けた栗原。小野沢センター長が志を同じくする医師や医療・介護機関の経営者達と親交を深めていく中で、「リコーが面白いものを持っているので、これを使って課題討議していかないか」とRICOH UCSを勧め、その都度、栗原は説明のために足を運んだ。「“顔が見える関係”とよく言われますが、この先生方はそれ以上の関係を望んでいると感じました。様々な立場の人達が、ひとつの課題を一緒に解決するためにRICOH UCSを必要としていたのです。それはまさに、このシステムを開発した弊社の思いと重なるものでした」

そして迎えた有志による遠隔会議のキックオフ。

「当日は、私も会場に参加しました。テーマは震災時の医療支援。普段会えない距離・関係の人達が、開始早々、挨拶もままならないうちにいきなり熱い議論を展開して……。そのときの熱気と興奮を一緒に感じたときに、“どんな風に広がっていくのかはまだわからないけど、必ず多くの医療・介護関係者に必要とされる！”と。RICOH UCSの可能性が見えた瞬間でした」（栗原）

導入の効果

いつでも、どこでも、誰とでも。
共通の課題を仲間と共に解決する

テレビ会議システムとしては後発のRICOH UCS。それが医療関係者に受け入れられた理由は3つ。コンパクトであること、操作が簡単なこと、国産であること。この中でも「国産であること」について、小野沢センター長はこう語る。

「同じ仲間だから。日本で起こる問題を、同じ気持ちで理解し合えるでしょう？」

コンパクトで場所をとらず、設置や操作が簡単なことは、どこでもすぐに会議に参加することを可能にした。365日24時間体制の医療・介護従事者でも、勤務途中や勤務後すぐに、近くの会場へ駆け付けることができる。RICOH UCSの機能を使えば、出張先でも安定した回線から、モニター参加して意見が言える。煩わしい最初の設置作業は、栗原が各施設へ率先して赴き、できるだけストレスフリーな形で使えるように心がけた。

「弊社ではいつも、基本マニュアル以外に使う人に合わせたA4マニュアルを作成しています。医療・介護関係の方は仕事柄パソコンを使うことが少ないため苦手意識の高い方が多い。だから、ここだけおさえればすぐに使えます！というポイントをまとめたマニュアルをお渡ししました」（栗原）

直接赴く機会が減った今でも、お客様のご厚意で、遠隔研修会には可能な限り参加。「神奈川県の他の営業担当者と連携して、在宅医療や介護の課題を一緒に学びながら、システム運用上のちょっとしたコツをお伝えできれば」と話す。

ご近所づきあいの拠点が繋がり、
大きなエリアがひとつになる

会議に参加するのは、医師、歯科医師、看護士、薬剤師、社会福祉士、ケアマネージャー、訪問介護のサービス提供責任者など。在宅医療・介護で連携が必要なメンバーが揃った。テーマは、症例検討や麻酔科指導、服薬指導といった地域共通の課題。設立当初は小野沢センター長が中心となって課題を決めていたが、1年後には自主的に議題があがるようになった。

「厚生労働省は2025年に向けて、中学校区単位、すなわち人口約1万人の規模ごとに、高齢者や障がい者を支える仕組みをつくると発表しました。でも、具体的な策はまだなされていない。それぞれの地域を牽引するリーダーを自然発生的に待つのでは遅いのです。近隣のメンバーが顔を合わせて議論ができるこの会は、地域のリーダーを発掘することも目的のひとつ」

各拠点でご近所ネットワークづくりが進み、そこで選ばれたリーダー達が、モニターを通じて課題の解決策を一緒に考える。これはまさに、「カオス状態の在宅医療現場に秩序を生み出す」という、小野沢センター長の仕掛け。RICOH UCSを使うことで、距離と人数のハンディを埋めることができた。

「惨事は見えないところで起きている。とくに都心部では、複雑に関係が入り乱れて、誰かがやってくれるだろう、という考えに陥りがちです。閉ざされた医療の体制をオープンにして、顔見知りの関係づくりができたのは嬉しいですね。非公式なので、肩書きに捉われずに意見を言うこともできます」

今後の展望

分割された自立組織の統合、
それこそが次世代で対応可能な医療体制

「今後は、転院時にRICOH UCSを活用したい」と、小野沢センター長は熱く語る。現在の医療体制は、高度化・専門化が進み、治療段階に合わせて病院が細分化されている。そのため、手術など急性期の治療が落ち着けば、患者は大学病院から個人病院などへ転院。転院先の医師に会うことなく、慣れてきた病院を移らなければならない。そこで活躍を期待されるのがRICOH UCS。

「顔見知りの医師や薬剤師、看護士などが、モニターを通じて患者さんの情報を共有。患者さんも、転院先の医師と顔を合わせて面談ができるので、安心して次の病院へと移ることができます」

ボタンひとつで広がる世界、
RICOH UCS が医療・介護の革新を可能にする

最後に、RICOH UCSを使った医療・介護現場の未来について、小野沢センター長に尋ねてみた。

「モニターを常時付けっ放しにして、情報共有ができればいいですね。モニターの向こう側が今どんな状況かも見えるし、いつでも気軽に相談できます。競合しない間柄(非公式)だからこそ、協力し合えることがある」

ボタンひとつで世界が繋がるRICOH UCS。近い未来、RICOH UCSは日本の医療の壁を取りのぞくことに貢献するかもしれない。

「こうしたシステムが発展していけば、100年後、病院は今の形態をしていないかもしれないですね。病院はあくまで緊急治療の場に、そしてみんなが望む在宅医療が実現している。暮らしを支えるために医学が使われることが理想です」

小野沢センター長が蒔いた種は、相模原・町田地区に根を張りながら、今後も在宅医療の新しい可能性を示していくだろう。

北里大学病院　www.kitasato-u.ac.jp/khp/

RICOH Unified Communication System (RICOH UCS)
リコー　ユニファイド　コミュニケーション　システム

RICOH UCS は、カメラとマイクを備えた、遠隔コラボレーションを可能にするツール。インターネット経由で映像・音声をやりとりでき、テレビ会議のような遠隔のコミュニケーションが簡単にできる。「RICOH UCS P3500」で相手の映像を表示するには、ディスプレイやプロジェクターとつないで使用する。RICOH UCSをつないだパソコンの表示画面を相手と共有したり(画面共有機能)、書画カメラのように部品などの実物を見せることも可能。「RICOH UCS P1000」は、ディスプレイ一体型でバッテリーも内臓。また、「RICOH UCS Apps」をインストールすることで、パソコンや iPad、iPhone からでも通信に接続することが可能。

※iPad および iPhone は、Apple Inc. の商標です。

【 特長 】
- 操作が簡単
  電話をかけるような簡単な操作で接続。
- ポータブル
  インターネットにつながる場所なら利用可能。
- セキュリティも万全
  データセンター、ネットワーク、端末それぞれでセキュリティを確保。
- 映像が途切れにくい
  無線接続でネットワーク状況に変動があっても、安定的に映像を送受信。

RICOH UCS P3500

RICOH UCS P1000

製品情報　www.ricoh.co.jp/ucs/

株式会社 リコー
〒104-8222　東京都中央区銀座 8-13-1 リコービル　　www.ricoh.com/ja

記載内容は2015年3月現在のものです。